第 312 号 2019 年　7 月 10 日発行
出雲市塩冶有原町 1-50
社会福祉法人ことぶき福祉会『ことぶき園』
　発行責任者：山根広美
Tel　：（0853）31 - 9900
Fax：（0853）31 - 9901

介護離職ゼロ（家族の介護を抱えている労働者が仕事と介護を両立できる社会の実現を目指す）という政策を政府が発表してから数年が経ちました。その具体策のひとつとしては、特別養護老人ホームやサービス付き高齢者住宅といった入所施設を増設し、介護サービスの受け皿を増やそうというものがあります。人手不足が叫ばれる中での入所施設の増設、また、その一方で『地域包括ケアシステム』（可能な限り住み慣れた地域で暮らし続けられるよう地域のサービス提供体制を構築し推進していく）を推進するなど、政府が打ち出している方針としては矛盾している点が多くあると思います。

ことぶき福祉会は 1987 年に人里離れた大規模施設への入所が主流だった時代に、地域の中で小規模で多機能な施設を目指し、制度にはない中で始まりました。その実践から、現在ではグループホームや小規模多機能型居宅介護などが制度の中に誕生しています。時代は変わっても創設時からの理念は変わらず、これからも継続していかなければならないと思っています。しかし、今の政策では時代を逆行していると言わざるを得ません。

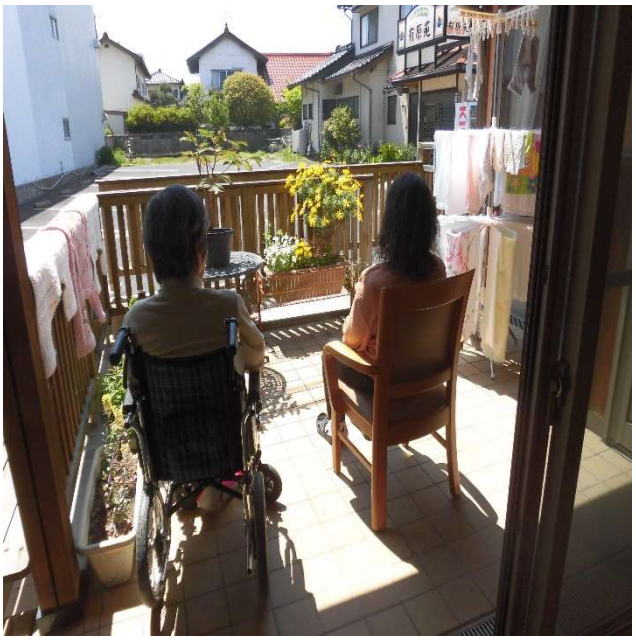
小規模な施設の良さは様々にありますが、まずは利用者一人ひとりときちんと向き合え、お年寄りさん同士、職員とのなじみの人間関係の中で、落ち着いた環境で暮らしを送れることがあると思います。その中で、本人の想いや家族の想いをくみ取ることを大切にしています。

ある日の夜の出来事です。部屋から顔をのぞかせた A さんが、私を部屋に呼び「よかった。あんたもおったかね。一人で不安だったに。家のことは大丈夫か。わしが世話かけるけんお前か〇〇さん（お嫁さん）がいっつも世話してごいて。だんだん、だんだん。私は幸せだわ。」と話されました。この方は、認知症があり私を家族の一人と勘違いして話されましたが、この言葉は紛れもなく家族の一人に向けられた言葉であったと思います。この方は、グループホームに入所はされましたが、月に一度自宅へも帰られ家族と一緒に過ごす時間を持っておられます。

住み慣れた家で最期まで暮らすということが本人にとっては最良のことかもしれません。本人や家族にとって入所が本位ではなかったかもしれませんが、この方にとって大切な家族や家が存在し、身近に感じることができるということ、これまでと変わらない暮らしを送る時間があるということは生きる力になっているのではないかと思います。また、それができる環境があるということも小規模ならではの魅力であると感じています。

本人の穏やかな暮らし、そしてそれを支える家族の穏やかな暮らしを守るための努力を続けていかなければならないと思っています。そして、私達福祉労働者は物事の本質を見極める目を持つこと、そしてそれを声に出し実現していけるように努力を続け、誰もが安心して暮らせる世の中になるようにしていく使命があると思っています。

私はことぶき園に入り、食事メニューが決まっていない事に驚きを感じました。私が前に働いていたグループホームでは、一週間分の食事メニューが予め決まっており、また、併設されているデイサービスより届けられた食事を頂くというものでした。

ことぶき園では、その日に冷蔵庫を見てメニューを考えます。ある日は「ちらし寿司が食べたいね」「茶碗蒸しもいいよね」と会話の中からメニューが決まりました。カレーライスやチャーハン、お好み焼き等お年寄りさんと一緒に作ることもあります。小慣れた手つきで野菜の皮を剥いだり、切ったり、炒めたりと長年されていたこともあり、料理はお手の物です。面会に来られていた家族の方がお年寄りさんと共に焼うどんを作って下さった事もありました。また、季節もの（筍やふき）のしごも一緒に行います。筍は出来ないと言われる方もふきになると自ら皮剥ぎをして下さいました。ちまき作りも自然と役割分担ができ、団子を作る人、そのボウルが動かないように抑える人、笹の枝に団子を刺す人、笹を巻く人、数える人など、皆さんが協力し合い役割を発揮しながら作られ、それはとても楽しい時間でした。

ことぶき園では職員も毎日同じ食事を一緒に食べます。食事の中から季節を感じてもらいながら「これ美味しいですね」と会話が弾み楽しい食事の時間を過ごしています。出来る事をおこなってもらいながら家庭に近い環境で生活してもらう事が本来のグループホームの姿であると日々感じています。